星乃 治彦（西洋史学）

ヴァイマル共和国制末期ドイツ共産党史研究
－反ファッショ・グラスルーツ運動との関連を中心に－

本論文は、旧東ドイツの文書館史料の開放という新たな史料状況を背景に、ヴァイマル共和制末期においてドイツ共産党（KPD）が抱えていた問題をとりわけ反ファッショ・グラスルーツ運動と関連させながら考察し、反ファシズムのポテンシャルを解明しようとしたものである。1930 年冬から 2 年間に集中して共産党史研究を学位論文にまとめたこと自体が、散発的な学術論文しか見あたらない日本の研究状況からみて、まず注目に値する。

H. ヴェーバーに代表される従来の全体主義的 KPD 論に対抗するかたちで近年登場してきた K.-M. マルマンの下からの社会史研究の成果をいち早く摂取し、かつその研究の限界を克服するため、改めて社会史的アプローチを政治史分析と接合することがめざされた。そのことによって、共和制末期における KPD 研究の新たな方向性が提起された。その方向性の下、本論文では、まず「下」すなわち反ファシズムのグラスルーツ運動の実態解明がめざされる。それに先立ち第 1 章では、同期の就業労働者と失業者の行動様式の差異という構造的問題が指摘され、KPD 支持層が失業者を中心とし、空間的には労働者街や街頭を運動展開の「場」としていたことが明らかにされ、それを前提に第 2 章では、1931 年春の代表者会議運動というグラスルーツ運動の実態が解明され、それとの接近を図る KPD の側の「人民革命」構想が検討された。

続いて第 3 章では、1931 年春のブラウンシュヴァイクという「地方」が路線転換のポテンシャルをもっていたことが取り上げられ、また第 4 章では、同年夏を中心に発した共産党内異論派による理論的転換の萌芽が着目された。こうした動きに呼応した路線転換が一頓挫した後、続く第 5 章で明らかにされたのは、コミンテルンからの指令と国内世論の狭間で混乱する KPD 像である。その後 1931 年秋に KPD が陥っていた混乱と苦悩の実態が、第 6 章で解明された。

第 7 章で文書館史料によって明らかとなったのは、KPD 指導部内の対立の詳細である。1932 年春の「ノイマン･グループの敗北」と従来呼ばれてきたものは、一見 KPD 内の路線対立のように見えながら、実は指導権をめぐる対立であった。そして指導体制を確立したテールマン指導部がその直後必要としたのが、自らの正当性を証明する具体的運動の成果であり、そこで再び注目を浴びるようになったのが、反ファッショ・グラスルーツ運動との共同である。

第 8 章および第 9 章で論じられたのは、1932 年夏に展開された反ファッショ行動（アンティファ）というグラスルーツ運動と KPD が共同した反ファシズム運動のポテンシャルである。1932 年秋アンティファが急速に展開し、農村や経営にまでその影響力が及び、それに伴いナチや右翼勢力が「共産主義の危険」という危機感を抱くようになり、その危機感が一つのバネとなってナチ政権が誕生した、と捉えられた。

得られた結論は、結果的に敗北したとはいえ、ヒトラー政権前夜のドイツにおける反ファシズムのポテンシャルが、運動の実態としても、理論的展開としても、同時代史料の中で度々登場する「ドイツ人民戦線」といわれる域にまで達していたということである。

以上、本論文は、下からの社会史的アプローチを積極的に試み、そのアプローチを政治史分析と結びつけることによって KPD の路線転換に至るプロセスの解明を試みたこと、およびその際、広範な公刊史料・文献に加えて文書館史料の活用により国際的水準たりうる実証が果たされたことにより、この分野の研究を深化・発展させることに成功している。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。